



防災 教育に

GIS

Geographic Information System GIS SERIES 2-8

第8回

島をつなぎ、川を分かつ輪中 —三重県桑名市—

静岡県立富士東高等学校 伊藤 智章

はじめに

「木曾三川」が伊勢湾に注ぐ河口に、「長島輪中」があります(写真1)。島の全長は約12kmに及び、文字通りの細長い島ですが、その名の由来は、島の形ではなく、七つの小島が^{ななしま}つなぎ合わされた「七島」にあるとも言われています。

「地理院地図」の「外部タイル読み込み」機能で「今昔マップタイル」を読み込むと、地図上に線や面を直接書き込むことができます¹⁾。新旧の地形図に書き込みを加えることで、長島輪中と流路の変化を表してみました。



図1 「七里の渡し」石碑の位置(地理院地図)



写真2 桑名七里の渡し公園



写真3 「七里の渡し」の石碑

1. 二つの「七里の渡し」の碑

桑名駅から自転車で約5分、揖斐川に面する桑名城跡に「桑名七里の渡し公園」があります(写真2)。番所の建物や石碑などがありますが、どことなく新しい雰囲気を漂わせています。地形図(地理院地図)には石碑の地図記号があるのみです。一方、揖斐川を渡って長島輪中の東岸にも石碑があり(写真3)、地形図には「七里の渡跡」と書かれています(図1)。

図2・図3は、桑名港から長島輪中にかけての新旧地形図の比較です。旧版地形図上で水面を着色し、着色部分を現代の地形図に重ねてみると、二つの渡し場はかつて水路でつながっていたことがわかります。ただし、旧版地図が発行された明治20年代の時点で長島町側の渡し場付近は



写真1 長島輪中の概観(Google Earthにより作成)

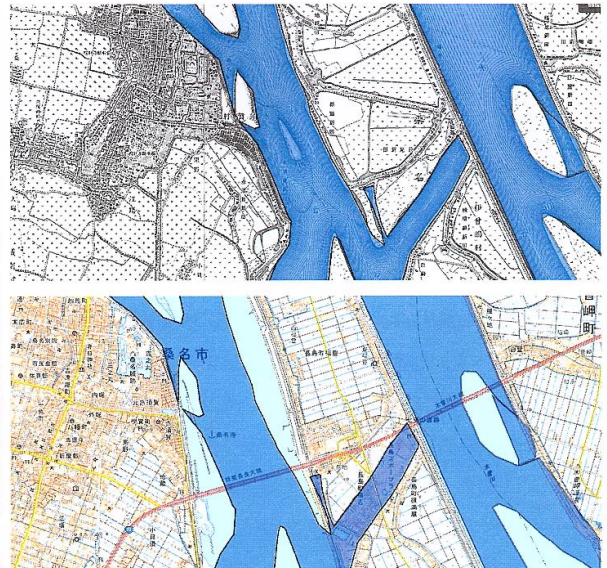


図2(上)・図3(下) 揖斐川下流域の新旧地形図
上: 2万分1地形図「木曾川河口」, 明治26年(1893年)発行
下: 地理院地図



図4 (上)・図5 (下) 「七里の渡し」と「三里の渡し」の航路と明治時代・現在の地形 (地形図の年代は図2・図3に同じ)

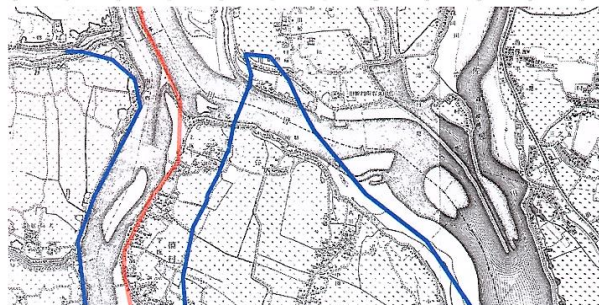


図6 (上)・図7 (下) 長島輪中北端部の新旧地形図
上: 2万1地形図「深谷村」, 明治26年(1893年)発行
下: 地理院地図

堤防で締め切れ、木曾川に出ることはできません。その後、水路は埋め立てられて、揖斐川の川幅が広がられました。

「七里の渡し」は、東海道の中で唯一海路による往来が行われていた場所です。江戸から数えて41番目の宿場である熱田宿(宮宿)と42番目の宿場町・桑名宿を結んでいました。脇往還として、木曾川を遡って佐屋宿(愛知県愛西市佐屋町)に行く「三里の渡し」がありました。

図4・図5は、地形図上で各宿場を航路でつないだ地図です。長島側の石碑がある場所は、桑名宿から長島を抜けた船が木曾川に達し、七里の渡しと三里の渡しに分岐する地点にあったと推測されます。

2. 輪中の拡大による流路の変更

桑名城から北へ進み、伊勢大橋を渡って長島輪中に入ります。平坦な道を自転車で30分ほど北上すると、「輪中の郷・歴史民俗資料館」があります(写真4)。入り口には付近の標高と昭和37年の伊勢湾台風の際の浸水の高さを示す標識があります(写真5)。

付近の地形の新旧を比較してみます。地理院地図上で川の護岸線を青で、揖斐川と長良川を分けている「油島千本松縮切堤」と、それに続く中洲(岐阜県境～伊勢大橋間)の

9km)を赤でなぞり(図7)、線を旧版地形図上に載せました(図6)。長島輪中の北端は現在よりも南にあり、輪中の北を木曾川が東西に流れていることがわかります。その流路に沿う形で三重県と愛知県の県境があります。現在は、長島輪中が北にせり出して対岸の船頭平輪中とつながり、木曾川と長良川を分け、さらに岐阜・三重・愛知の三県境付近にまで伸びていた「油屋千本松縮切堤」が南に延伸される形で揖斐川と長良川が分けられました。伊勢大橋まで伸ばされた堤の延長は約9kmあります。

3. まとめ

地理の授業で「輪中」を取り上げる際、江戸時代から続く治水の歴史と水屋など、洪水を念頭に置いた生活を取り上げることが多いかと思います。しかし、現在見られる川の景観は、明治以後に導入された近代土木技術の導入によって流路の付け替えによってなされたこと、新旧地形図の比較から、明治の比較的早い段階から大規模な工事が手がけられていたことがわかりました。それは単なる土木技術の進歩だけにとどまらず、人や物の担い手が水運から陸上交通(道路の整備と鉄道の敷設)へ代わったことも背景にあると思われます。

海路で片道4時間かかっていた桑名～熱田間の輪中地帯にはいくつもの橋が架けられ、桑名市は名古屋の通勤通学圏に入っています。行き来が便利になった一方で、低地や旧河道が住宅地になっている場所も見られます。「水屋」を建てて洪水に備えてきた先人の知恵が、再び活かされる時に来ているのかもしれません。

河川防災をどう教えるかを考える上で、輪中は、是非一度訪れていただきたい場所です。



4 輪中の郷・歴史民俗資料館



写真5 標高と浸水深を示す標識